

ドイツ語とオーストリア文学

人文学部教授 堺 雅 志

ドイツ語との出会い

ドイツ語の午後の挨拶 Guten Tag!ということばに触れて、英語の Good day!も目的語であることを知った。すなわち主語と動詞の前略。形容詞 gut の後につく変化語尾-en が目的語であることを明示してくれ、ドイツ語と姉妹関係にある英語の表現も、こんにち変化語尾を失ってはいるが、潜在的に目的語である。翻って日本語の午後の挨拶「こんにちは」は、以下につづく文言の後略であることに改めて思い至る。この些細な事実もドイツ語を学んでずいぶん経ってから気づいたことである。爾来この極り文句「こんにちは」を口にするとき、この後になんと言おうかと考え込むようになったし、Guten Tag!というときは、「よい午後を」ところを込めて言えるようになった。「些細な事実」であるけれども、ぼくにとっては「目から鱗が落ちる」体験だった。ドイツ語に出会わなかったら、そしてそれを軸に西洋学を学んでこなかったら、「目から鱗が落ちる」という慣用句もそもそも日本古来のことわざではなく、聖書のことば(『使徒行伝』第九章)であったとは、キリスト者でない身の知る由もなかったであろう。

そのむかし、大学に入学すると当然第二外国語を選ばなければならなかった。当時はドイツ語かフランス語かのどちらかしか選択の余地はなかった。どちらかを学ばなければならない「強制」を前にして、ぼくはドイツ語を選ぶ「自由」を享受した。おそらくこの「強制」がなければ今、ドイツ文学研究なるものを生業としてはいなかったであろうし、ドイツ語圏の文化の深さに幾度となく感嘆しドイツ語圏を囲むヨーロッパの多様な文化(事実ドイツは九つの国と国境を接している!この数は他に類を見ない)に蒙を啓かれていなかったであろうし、陸続きであるアジアを含め、海を越えた新大陸を含め、時間と空間を越えて存在する書物の険しい森の中を涉猟し

て廻る自由は享受してはいなかったであろう。

ドイツ文学との長いつきあい

ドイツ文学への興味はそもそも高校の頃に遡る。むろん当時「ドイツ」を意識していたわけではまったくない。ただフロイト(S. Freud)やユング(C. G. Jung)の心理学に興味を湧いた。「夢」、「無意識」、「精神」、「欲動」、「錬金術」など、輪郭ははっきりしないが魅力的なことばにとらえられたというのが理由である。彼らがオーストリアのユダヤ人とドイツ語圏のスイス人であることなど知る由もない。彼らの著作の翻訳者である先生のもとで勉強したいと思った。恩師となるその先生を、ぼくははっきり心理学の先生であると思いついて入学したが、入学して気がついたら、独文学の先生であった。(十八のときにお会いした恩師との師弟関係は、大学、大学院、研究員、助手、助教授そして教授 このとき恩師は前任校の学長であった。そしてこんにちに至るまで二十八年間つづいている。)そもそも「各国文学」なるものを意識していた生徒、学生ではなかったので慌てた。慌てて手当たり次第に可能なかぎり「ドイツ文学」を読んでいった。なかには高校時代にそれとは気づかず読んでいたものもあった。ゲーテ(J. W. Goethe)、シラー(Fr. Schiller)、ハイネ(H. Heine)、ニーチェ(Fr. Nietzsche)、リルケ(R. M. Rilke)、マン(Th. Mann)、ヘッセ(H. Hesse)、カフカ(F. Kafka)…… そうこうするうちに、フランス文学やロシア文学、英米文学やイタリア文学、スペイン語文学など、もちろん翻訳ではあるが「原語」とその地域を意識しながら読むようになった。それにドイツ語圏にはドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタインほか、東欧をはじめ周辺地域のドイツ語文学があることに気がついた。

学部、修士と無謀を承知でトーマス・マンの長編

小説『魔の山』*Der Zauberberg*に分け入り、下山が困難だったころにぼくはミュンヘン大学に留学する。留学前に公表した論文にちらりとうこう書いた。「手段であった言語は素材となり、対象となり、主題となった。言語について言及し、作品化することが目指された。言語そのものに正面から問いかけ、取り組んだ多くの作家たち、ホフマンスタール、カール・クラウス、リルケ、ムーゼル、カフカ、ヘルマン・ブロッホ、彼らにはその問題意識の明らかな痕跡が見られる。」(拙論「初期トーマス・マンと言語危機」、「九州ドイツ文学」第八号所収)ここに挙げたのは、すべてウィーンで活躍した文士たちである。なかでもカール・クラウス(K. Kraus)には高校時代に出会ったフロイトやユング同様の魅力の予感を感じた。クラウスは文学史的には、ジャーナリストと紹介されることが多い。彼の文筆活動のほとんどが、個人誌『炬火』*Die Fackel*の執筆と編集と発行とに捧げられていたからである。けれども彼自身はジャーナリストをとことん嫌っていた。彼の著作の大部はジャーナリズム批判に端を発する言語批判である。クラウス二十五歳のとき、彼の才能をいち早く見いだした「新自由新聞」が、自社の「文芸記者」として彼を採用しようと申し出たとき、彼はそれを断った。彼はその「新自由新聞」を向うに回し、巨大新聞社と文字どおり筆一本で亘り合った。そして同時代の名だたる文士たちの作品に対して揺るぎない視点から批判を繰り広げた思想的偉丈夫であった。

留学時代、足しげく通っていたミュンヘン大学そばの古書店で、あるときクラウスの『炬火』の縮刷版ではあるが全冊揃いを見つけた。震えた。彼の思想がこのなかに詰まっている……。貪るように読んだ。とはいえ貪れば消化不良を起こすほどに咀嚼しがたいドイツ語であった。けれども彼の著作を通じて、ぼくのことばとの関わり方は一変した。「ことばが私を支配する」という、「人間よ、ことばに仕えることを学べ」と要求する、「私の言語信仰は、ローマへ通ずるすべての道を前にして懐疑する」と一見相矛盾する概念を「ことば」をめぐる営みのなかで結びつけてみせる。「ローマへ通ずるすべての道」を「権威から発されるすべての言説」と読み替えれば、権威の虚妄なることは暴かれる。「ことば」のなかに散在するむき出しの「思想」をかたちづく

ること。クラウスによればこれが詩人の仕事である。「詩人の仕事」とは具体的にはいかなるものか探りたいと思ったのが、クラウス研究のきっかけであった。爾来二十年余りぼくは、カール・クラウスを軸にオーストリア文学、殊にウィーン世紀末文学の絢爛と頹廢との香りに酔いつづけることになる。

福岡の地でオーストリア文学を

ところで「オーストリア文学」という概念はきわめて新しい。なぜなら中世より長らく、オーストリアこそヨーロッパだったのだから。十九世紀の国民国家誕生期のせめぎ合いのなかで、大ドイツ主義が国民国家かの二者択一の議論に乗り遅れたオーストリアは、かつて神聖ローマ帝国を標榜した広大な国土をしいしだいに切り離し狭めてゆく。近代、ベルリンとウィーンとに中心を持つ楕円形のドイツ語圏のなかで、オーストリアは自らが円の中心であると疑わなかった……。1938年の「併合」によってオーストリアはいったん消滅する。戦後の瓦礫のなかのウィーンは、映画『第三の男』のなかに映像としてとどめおかれている。一度リセットされた国家は二十世紀後半、永世中立国の道を選択し、自らの歴史を問い直す。「オーストリア文学史」が、「オーストリア文学史」として本格的に編纂がなされはじめたのは実際に戦後のことである。西洋の歴史に冠たるオーストリアが、改めて自国の文化を問い直したときに着手したのが、自国の文学の編纂であった。これを眺めるに譬えば、「各国文学」としてその名を冠することが世界に認知されている「各国文学」がどれほどあろうと思いを馳せた。と同時に「各国文学」とは何かという問いに改めて直面させられた。

福岡大学は、西日本における最大規模のドイツ学研究の拠点であるばかりでなく、この「新しい」オーストリア文学研究の日本における伝統的な拠点でもある。この研究拠点にこのたび奉職できることに心の底からよろこびを感じている。振り返って考えると、長かった学生時代は、ぼくの人生を決定づけた。今ぼくは、はじめて出会ったときの恩師の年齢を過ぎてしまった。ぼくの半生の大半は恩師と書物との出会いからなる。だからこそ今、福岡大学の学生に対して教育に携わるに値する研究者になりたいと、決意を新たにす。

実践的な学修による人材育成

法学部教授 岡本 信一

はじめに

今年の4月から法学部で「行政学」、「キャリアプランニング」等を担当している岡本信一です。

私は、国のキャリア官僚として、内閣官房、内閣府、総務省、旧科学技術庁等で二十数年働いて来ました。この間、独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）や公文書管理法（平成21年法律第66号）の企画立案等により国の新たな行政制度の構築を行うと共に、国際共同研究総合推進制度の創設（平成8年度）つくば国際会議場（平成11年6月開館）の建設、PKO法に基づくイラク難民及び被災民の救援活動（平成15年）、構造改革特区法（平成14年法律第189号）及び地域再生法（平成17年法律第24号）等に基づく、東京都豊島区、島根県隠岐郡海士町等の全国各地の地方公共団体の地域活性化の支援（平成16年～）等にも尽力して来ました。

これまでの大学等との関わり

地域活性化や公文書管理等をテーマとして、東京大学、横浜国立大学、法政大学、明治大学、九州大学等で、講演や講義、ゼミ等を行って来ました。

ライフワーク的に、文化芸術による地域活性化をテーマにしていることもあって、東京藝術大学の関係者との御縁も深く、にしすがも創造舎、取手アートプロジェクト、ヒミング、ゼロダテ、アーツ千代田3331等の活動を応援して来ました。

元気な地域には元気な人々

私が関わってきた全国の地域活性化の現場の中で成功している所には、地域再生に取り組む元気な人々がいます。

その代表例である島根県隠岐郡海士町は、積極的な産業振興策やマーケティング、そして、定住促進策や島の宝探しをする独自の商品開発研修生制度等

による若者の呼び込み等によりIターン・Uターンでも大きな実績（注1参照）を挙げて全国から注目され、今では、地域再生のTOPランナーの一つと評価されて、平成19年度には地域づくり総務大臣表彰の最高賞の大賞を受賞しました。

隠岐島前地域の持続的な発展の為には人材育成の基盤である高校の存続が不可欠

しかし、長期的な地域再生を考えた場合に大きな課題が残っています。それは、中ノ島（海士町）、西ノ島（西ノ島町）、知夫里島（知夫村）からなる隠岐島前地域の唯一の高校である隠岐島前高校の存続問題です。海士町に立地する同校は、隠岐島前地域で少子高齢化が進み、生徒数の減少により、存続が危ぶまれていました。

島の高校が無くなれば、高校に行く場合は、本土に進学しなければならなくなり、下宿代等も含めれば一人当たり3年間で約4百万円もかかってしまう。

これを子育て世代の一家が負担に感じて、島外に移住してしまえば、島の高齢化は一気に進み、島の存続にも影響が出てきてしまう。『学校残しが島残し』と言われる所以です。

高校と地域の魅力を訴える切り札としての映像作品『ヒトツナギ』を制作

こうした中で、隠岐島前高校の学生有志が、全国の中高生に島と島前高校の魅力を感じてもらいたいという思いから、第一回観光甲子園に観光プラン『ヒトツナギ～人との出会いから始まる 君だけの島前三島物語』で挑戦し、見事グランプリを獲得し、島根県庁の御支援を得て、平成22年3月に本土の中高生10人を招いて、プランを実現しました。

その現場を、記録に残し、全国の人々に、島の自然や人々の魅力と参加した中高生が島で成長してい

く姿を観ていただきたい。そして、隠岐島前高校への島留学や島への訪問を考えていただきたい。そんな思いから、私が企画・プロデュースした『ヒトツナギ』映像化プロジェクトは始まりました。

企画の実現や製作には、様々な困難が伴いましたが、映画『待合室』の板倉真琴さん、映画『眠る男』等で知られる丸池納さん、東京芸大音楽学部大学院（当時）の松岡美弥子さん等の御協力を得て、映像作品『ヒトツナギ』は、8月に20分版が出来上がり、その後、若干の映像を追加した30分版も10月に完成しました。

完成した作品は、隠岐島前高校のHP（<http://www.dozen.ed.jp/news/2010/0929-1033.php>）にUPされ、全国各地での現地のニーズに合った形での企画上映会も、北海道東川町、大分県竹田市、宮城県気仙沼市、愛知県名古屋市、三重県伊勢市、神奈川県横浜市、岡山県真庭市及び美作市等で実施しており、御好評いただいております。

隠岐島前は学校残しの成功例としても注目される

映像作品『ヒトツナギ』は、隠岐島前高校の魅力化の取組（注2）と相まって、隠岐島前高校の志望者増に貢献し、平成23年度は1倍以上の倍率となり、平成24年度は、募集人員が1クラス40人から2クラス80人に倍増され、入学者は、島前地域から36名、県内本土から2名、県外から21名の合計59名となりました。

全国の公立学校の平成14年度から平成22年度までの9年間の廃校数は、4175校となっており、特に、高校は近年毎年70～100超の数廃校となっています。この様な中、離島で生徒の募集数を倍増させた隠岐島前高校は、注目の的となっており、全国から視察が相次いでいます。

『ヒトツナギ』をきっかけに地域の高校生が動く

映像作品『ヒトツナギ』を見て、様々な活動も始まっており、例えば、平成23年度に岡山県真庭市の高校生有志が今自分たちに出来ることを考えて、市民のサポートを得て、自分たちが作ったお米を、平成23年11月に東日本大震災の被災地である宮城県名取市の仮設住宅、高校、小学校、保育所等に届けると共に、被災地で現地の状況を見聞きして、それを

真庭市に持ち帰り、平成24年2月18日に久世エスパホールで発表して市民と共有したヒトツナギ・お見米プロジェクトが実施されています。

大学教育においても地域貢献と実践的な学修が求められている

平成15年度の文部科学白書では、「近年、地域活性化の起爆剤、地域づくりの核として、地元大学を積極的に活用した各種の取組が注目されています。これは地方公共団体にとっては、地域産業振興という視点だけではなく、医療・福祉・人材養成、文化など全般にわたり、長年にわたって蓄積された大学の人的・物的資源や総合力を最大限に活用できるメリットがあります。また、大学にとっては、事業を展開することにより、地域社会へこれまでの成果を還元でき、今後の教育研究の活性化につながるというメリットがあります。」とされ、平成17年1月28日の中央教育審議会の「我が国の高等教育の将来像（答申）」では、社会貢献の役割を言わば大学の「第三の使命」と位置づけています。

さらに、中央教育審議会の大学分科会で平成24年3月26日に審議まとめが行われた『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』では、将来予測が困難な時代を迎えて、産業界や地域社会は、変化に対応したり未来への活路を見いだしたりする原動力となる有為の人材の育成を大学に求めており、学生にとって、①大学において「答えのない問題」を発見してその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること、②実習や体験活動などを伴う質の高い効果的な教育によって知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けることは、自らの人生を切り拓くための最大の財産となるとした上で、大学や教員が、知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育をすることにより、生涯学ぶ習慣や主体的に考える力、どんな状況にも対応できる力を育成することが、学生の将来や我が国の未来にとって、果たさなければならぬ重要な責務であるとしています。

実務家出身の私は、福岡大学において、講義やゼミ等で、地域や社会が抱える問題やそれを解決する為の具体的な取組等（地域包括ケアシステム等）を取り上げ、さらに、地方公共団体でのインターン研修や東京研修等を通じて、学生に課題解決型の能動的な学修の機会を与えて、将来、地域活性化に役立つ人材育成をしていきたいと考えています。

（注1）人口2581人（平成17年国勢調査）の海士町では、平成16～21年の6年間で257人（156世帯）のIターンが定住（定着率80%）しました。

（注2）隠岐島前高校は全日制普通科の県立高校で、平成22年度から、2年次より進路に応じた科目選択（特別進学コース、地域創造コース）が可能となり、島留学及び町営塾の整備も行われました。

